



What is hardest of all?

福島 聡

熊本大学病院皮膚科教授

“What is hardest of all? That which seems most simple : to see with your eyes what is before your eyes.”

私が若いころ、熊本市民病院の木藤正人先生というお師匠さんに教えてもらったゲーテの言葉である。私が書きためた「皮膚科診療ノート」の表紙裏に大きく書いてあり、皮膚科医として常に忘れてはいけない言葉として、肝に銘じている。

若き皮膚科医だった私は、内科の往診に呼ばれ「顔が真っ赤」な患者を診察した。ひと目みて接触皮膚炎と判断した私は、得意げにステロイド外用と内服を指示して、皮膚科外来に戻った。木藤先生に報告したところ、「顔面の紅斑に表皮の変化はあったとね?」と聞かれた。そういえば、どうだったかな? よくみていなかったかもしれない。木藤先生は私を連れてもう一度往診に行き、ひと目みてステロイドの指示を中止した。「表皮の変化がなかる? 薬剤性の一過性の発赤だから、痒みもおさまっているなら何もせず経過をみるとよかよ」。私は、何もせず様子みるなんてそんな、と思いつつ渋々従った。翌日往診すると患者さんは「あのあと、すぐに顔の赤みはひきました」とおっしゃった。私は皮疹をみていたようで、まったくみえておらず、お師匠さんはみなくてもみえていたのである。

あるときは、ほぼ全身に湿疹のある患者さんが、もう何カ月も前医で治療しているが治らないと来院した。私は「これは慢性湿疹なのでステロイドの

外用と内服ですね」と患者さんに説明し、木藤先生にその方針でよいか一応確認した。お師匠さんは、患者に腋窩をみせるようにいい、腋窩だけに湿疹がないことを確認し「textile dermatitisだから、洗濯洗剤を変えさせて、外用薬は変更せずに、再診してごらん」とおっしゃった。いやいやいや、こんなにひどい湿疹で、こんなに痒がっているのに、治療は変更なしだって!? と私は訝しんだが、いわれた通りにしてみた。翌週、完全に湿疹の治った患者さんを見て、私は心底驚いた。皮膚科って奥深いな、と感じた瞬間である。

お師匠さんはこうもいっておられた。「ベテランの皮膚科医は知識が増えて、よくみなくても頭だけでみられるようになる。でもこれは危険。これでは大事なことを見逃すかもしれない。目の前にあるものが何なのか、知識がなければみえないし、知識だけでみようとしてみ落とすこともある。しっかり、みないといけんとよ」。

「目の前にあるものをみるのが一番むずかしい」。だから皮膚科は面白い。